

5 幼児期の病気は、兄弟の有無が大きく影響している。

6 授乳期の栄養を分類してみると、幼児、児童期の消化器の疾病に對しては、混合栄養で育った子供が、一番、罹患率が高く他の栄養児の二倍弱となっている。殊に消化不良になったものが消化器系の病気の四分子一を占めている。

呼吸器系の疾病に對しては、人工栄養で育った児が、非常に高率を示し殆ど百パーセントに近い数字が見られる。

発疹性の病気に對しては、混合栄養児が他の栄養児に比べ、わずかに高い感染率を示している。

7 前の6を総括して云うならば、この調査では、母乳栄養児は、他の栄養児に對し、比較的病気にかかりにくいと云う結果を見る。

以上が調査結果のまとめであるが、これは、飽くまでも、統計的な調査への資料として算術平均により得た結果であつて、今後、これをもとに一層深く調査して行きたいと願つてゐる。

二、三才児の社会的行動の研究

愛育研究所

植松治子

山下先生の著書「幼児心理学」にも明記されている様に、子供が

第一反抗期に於いて、その周囲の大人と好ましい人間関係を結び得ると否とは、その後の発達に重大な影響を及ぼす。然し私達の周囲には、之等両者の関係が一般に好ましくなく、時に善意に充ちた之等大人による刺戟の与え過ぎは、問題の親や子をつくつてゐる。そこでこの様な親子の要望に答え、試案として愛育幼稚園に「母と子の教室」を附設し、二、三才児の保育と並行して、その母親に正しい育児の知識と、技術を体得させる時間を設けた。

〔研究方法〕昭和二十九年四月より翌三十年三月迄、週一回集つた子供二十名の中、十五名を対象として、登園後三十分を経過した後の十分間、子供達を自然の状態に於いて、それらの総ての行動觀察を記録した。

〔研究結果〕以下その記録の中から社会的行動に関する面だけを抜き出して、(1)「社会的行動の現れ方の型、(2)発達の経過、(3)その他について、整理したものを簡単に報告する。

先ず私達は、觀察記録に先だち、子供の社会的行動の型を次の様にA、B、Cの三群に区別した。

A群 母親と他の場所を往ったり来たりするが、最後には完全に親から離れて保母や他の子供との仲間遊びが出来る様になつた。

B群 〴〵もじもじして親から離れないが後には並行遊びをする。

C群 親やその他家族の者につききりて離れないが独り遊びや他の子供の遊びを傍で見ている時はある。

この各群の子供達がどの様な経過をとり乍ら発達していったかを夫々の群の中から、比較的明瞭な群の型を具えているケースについ

〔事例〕

A群のAの場合	B群からA群に発達したBの場合	B群がB群のままて終わったTの場合
<p>A子は満三才、I. Q. [140]の女兒である。</p>	<p>B夫は満三才、I. Q. [111]の男児である。</p>	<p>T子は満二才、テスト不能の女兒</p>
<p>一回目は 10時30分に登園して母親から離れ、絵をかいたり積木をしたりしている子供を暫らくニコニコ眺めていたがそこへ行き「汽車ごっこ」をする。保母のピアノに合わせて不完全乍ら、すり足のようなスキップをする。お片付けになると椅子を机の囲りに並べ、積木を箱に片づける。</p> <p>食事の時は「頂きます」「ごちそうさま」帰る時は「さよなら」と大声で言う。</p> <p>二回目は 登園後暫らくは母の傍で周囲を見ていたが、やがて塗絵をしたり、砂場で遊んだり、ブランコに乗ったりする。</p> <p>三回目的時も同様。</p> <p>四回目 滑り台でニコニコ笑って滑っていると男の子が「こっちが早いんだ」と言う、それに「こっちが早いんだよ」と言い返し「早いんだ、早いんだ、一番」と笑う。ブランコの所で傍に来た女の子に「危いよ」と言い乍ら 3~4 回こぎ降りてから「ハイ」と言って交代する。この様にA子は2人の子に話しかけている。</p> <p>男の子に対しては競争意識をもつ遊戯的態度であり、女の子に対しては、ブランコを替ってあげようとする意志が見られる。之等の交渉は明らかに他から他への働きかけと見てよからう。</p> <p>十四回目 には内容は省くが他の子と簡単な会話を交わしている。</p> <p>この様にしてA群のA子はその後、回を重ねる毎に、その社会的行動の面に、裾がりと深さを持っていった。</p>	<p>一回目 10時に登園、上靴をはかせてもらい、バスケットを手に持ったまま、母親にくつついて他を黙って見ている。保母から渡された折紙で母親に飛行機を折って貰う。</p> <p>母に云われてその傍で恐る恐るクレヨンで絵をかいた。</p> <p>二回目 登園後、母の傍で汽車の積木を机の上に並べ「ポッポー」と言ったり、「今は山中、今は浜」と鼻歌の様に唱い乍ら、他の女の子を黙って誘い入れる。</p> <p>八回目 母から完全に離れて遊ぶ。「フレフレー慶応」と言って「ジャングルジム」のてっぺんで騒ぐ。</p> <p>他の子供達が下を通ると「オイ、登って来ないか。一番電車でございませう、ガッシュンガッシュン」等盛に友達に向けて大声を連発する。この様なことを繰返しながらついに完全にA群に入った。</p> <p>十回目 柿の実拾いの事からリーダーになろうとして他の男の子とけんかする。</p> <p>二十三回目 4人の子供を集めて「皆汽車ごっこだぞ、オーイ、君一番、いいか、つながって纏まるんだぞ」等、とにかく一人一人に役割をつけて、ごっこ遊びを始め、他の子供をリードして一つの纏った遊びが出来る様になった。</p>	<p>このケースは遂にA群に移らずに終わったが、若し適切な誘導がなされたならば、当然A群にも発達した子供と考えられる。</p>

C群からB群に発達したCの場合	C群がC群のままで終ったNの場合
C夫は満三才、I. Q. [126]の男児である	N夫は満三才、I. Q. [131]の男児である
<p>一回目 保母に「お早よう」と言われて母親の後に かかれる。始終母親から離れず、左手の指をしゃぶ り乍ら他の子供の遊びを傍観している。一度母から 離れて外を見ていたが、又母の傍に戻り、帰る迄そ うしていた。お弁当の時皆食べ始めても食べようと せず、人の顔許り見ている。保母に一口、二口食 べさせて貰ったが、後は又黙って見ているだけで遂 に食べなかった。このケースは二回～三回と同様な 態度をくり返し、四～五回目の時暫らく母から離れ 一人で塗絵をしたが、やがて立上り、ぼんやりと指 をくわえていた。</p> <p>六～七回目 は又母親の傍から離れなくなった。</p> <p>八～九回目 も同様である。十～十一回目には当幼 稚園に通っている姉がついて来て、一緒に絵をかいた。 尙ニコニコして積木遊びをした。</p> <p>十七回目 には「人蔘と妻ヲラ」のおつなぎの時に 「真中」「え」「え」と妻わらと人蔘を交互に保母に 示しては問いかけ、そつと気をつけてさし通す。 終ると「なくなっちゃった」と示す。 保母に首飾にしてかけて貰うとニコニコする。</p> <p>十八回目 男の子にブランコを交替して貰いニコニ コ笑って一人に乗る。保母が「20」と数えると、ブ ランコを降り、他の子と交替するが、又再び乗り、 「動かない、動かない」と足で土をけり乍ら周囲を 見廻すが「おしてくれ」とは頼まなかった。</p>	<p>一回目 登園以来母親の傍を絶対に離れない。 バスケットを置くにも、紙を貰うにも、コップを渡 された時も、椅子に腰かける時も、母親により添っ て動く。 「お絵かきしましょう」と保母に誘われても動か ず母にまつわりつき、他の子供達が積木で遊んでい るのや、ままごと遊びをしているのを、母の袖の下か らのぞいていた。 お弁当は、パンを少し食べた。</p> <p>五回目 母に始めてクレヨンを持たせて貰う絵をか く、その後「母の講座」の席へ行つたまま、子供達 の部屋には遂に姿を現わさなかった。</p> <p>七回目 母でなく、女中が付添って来る。不断より 元気がなく、一日中女中の袖に縋って、他の子供の 遊びをぼんやり眺めていた。 然しこの日始めて、帰る時名前を呼ばれて「ハイ」 と返事が出来た。</p> <p>九回目 母の膝もとから離れなかったが、暫らくし て母親から降りて独りで傍にある積木を手にとり、 いじった。約三分程経つと、思い出した様に母の方 え行き、帰る迄膝の上から降りなかった。</p> <p>十～十一回 も同様。</p> <p>十二回目 は母の傍から離れる。保母に絵本の中 の人を示され「これは何」「これは」「これは」と尋ね られても、一言も返事をしない。</p> <p>十三回目 一日中母の膝で過す。</p> <p>十五～十六回目 女中と共に絵本を見たり、絵を かいたり、他の子供達の遊びを見たりしていた。 この状態は最後まで続いていた。 以上の様にこのケースは常に大人と共に室内 遊びは出来たが、但し戸外の遊びは出来なかった。</p>

て、記録の概要を述べる、但し時間の都合上、所々を抜き出す事にする。

次に第二表は、この各群の子供達の発達していった経過を示すものである。(図表は頁数の都合により省略)

さて、先述の具体例からもうかがわれる様に、これ等十五名の子供達は、グループ行動の中で各々異った現れ方をして徐々に発達していったのであるが、各群の子供の遊び方の段階別を山下先生の著書を参照し、それにならって別けてみる時、吾がA群は、三段階の遊びを主として、四段階。B群は二段階を主として三段階。C群は一段階を主として二段階の遊び方をしている。その発達の過程を第三表で見るとA群の四人にB群の五人が入って九人になり、B群では、残った二人と、C群からの三人が入って五人になり、C群は一人になった。(表省略)

ブラツグが二才台では独り遊び、傍観、並行的遊び、の三つが大部分を占め、三才台から四才台へと年齢が進むにつれて急激に減ると言っているが、ここでも同じ様な現れ方をしている。

以上、簡単ではあったが、一年間の観察記録の結果を報告した。子供は集団生活していると、放置しておいても、或る時間が経過すると、社会性が発達し、ある程度迄の社会的行動が出来るものと言えよう。但し、C群のNが現在、吾が幼稚園生活になじむ事が出来た事例から見ると、二・三才児の保育の時に適切な誘導がなされていたら、比較的短時間で、他のC群の子供がB群に移った様に、発達していったかも知れない、然し社会性を早期に養う事自体にも問題がある。ともあれ、この度の試案の結果から痛感させられる事

は、二・三才児に、基本的習慣の基礎づけこそ、第一義的なものと言ふ事が出来、社会性の問題は、第二義的なものである。現在二・三才児保育を単なる自然集団としての観察ではなく、保育するとう意図のもとに、前年度の試案を基にして、計画を立て、その生活を積極的に誘導し、尚行動観察の記録をして未解決の問題を研究しつつある。最後に、附言したい事は、この研究により、二、三才児といえども「リーダー型」「模倣型」「けんか型」と言う型や、「仲間になる子供の性質の分類」等の課題が浮び出て来た事である。

マザリングの実験

名古屋市立保育短期大学

珠川善子
安藤味法子
甚目朋

施設に収容されて育つ子供は、ホスピタリズムによって、円満なパースナリティの発達が阻害されるといわれている。マーガレットリブルはこのホスピタリズム解消の一方策として、マザリングを主唱した。私共はその重大な意味を感じて、追試実験をした。

マザリングとは、リブルによれば、成熟した感情の健康な女性が、子供を生み育てる時自然に現わす凡ての愛撫の動作を含むもので、食物と同様に欠く事の出来ないものである。